

人のつながりを大切に、 地域での呼吸器内科の普及を目指して

いとうクリニック院長 伊藤 光佑

中学時代の体験から医師を目指す

私が医師を目指すと思ったのは、福岡で野球に熱中していた中学2年生の時です。レギュラーとして最後の大会に向けての練習中に肩を負傷してしまい、大会への出場を諦めかけていたとき、福岡ダイエーホークスのメディカルドクターを務めていた方に診ていただく機会を得ました。驚いたことに、たった1度の診察で肩の症状が劇的に改善したのです。「この動きができないのは、ここの筋肉が弱いからだよね」と先生に手を添えてもらいながらトレーニングをすること数十秒。筋力が変わることを実感しました。「お医者さんってすごい」と身をもって心から思ったのです。医師の家系という環境にありながらも、それまでは医者になろうとは思っていなかったのですが、そのときの感動から、自分と同じようにケガで苦しんでいる子どもたちを助けられるようなスポーツドクターになりたいと思い、勉強を始めました。

命の根幹に関わる呼吸器内科の道へ

その後、久留米大学医学部に入学し、整形外科医になるべく勉強に励んでいました。ですが、実際に学んでみると、手術の際など瞬時の判断を求められる場面が多く「どうも自分の性格に合わないな……」と感じ、国家試験を受ける頃には小児科医を目指すことを決意。小児救急で有名な北九州市立八幡病院で研修を受けました。そこで、長

崎大学呼吸器内科の先生方に出会ったのが、呼吸器に進むターニングポイントとなりました。カンファレンスで呼吸器疾患の患者さんのレントゲンやCTの読影会をしたのですが、たった1枚の画像からなんとも多くの考察が導かれていったのです。「この画像からそういうことまで読み取れるのか」と、奥の深さに学問としての興味が湧き魅力を感じました。呼吸器疾患は、肺炎1つをとっても病原体も病変も症状も多彩であり、また、難治かつ難渋する重症例が多く、生命に関わる領域です。人の最期は必ず呼吸と循環が破綻して命が絶たれる——。そのような命の根幹に関わる呼吸器疾患の道に進みたいという考えに変わりました。

講座の新設に関わった経験が開業の糧に

久留米大学呼吸器内科に入局し、関連病院などで呼吸器内科医として研鑽を積んでいた頃、山口大学に新しく呼吸器・感染症内科が立ち上がるからと、医局の先輩に誘われ立ち上げスタッフとして2015年に山口大学へと赴任しました。山口県は全国の中でも呼吸器専門医が少なく、県の基幹病院である山口大学にさえ呼吸器専門医がいないという深刻な問題を抱えていました。

呼吸器・感染症内科の立ち上げは教授、准教授、外来医長、そして病棟医長である私の4人でまさしくゼロからのスタートでした。大学病院という性質上、難治性疾患の患者さんが集まります。講座が新しいためにどのような疾患の患者さんも受